

マスの豊漁博打の貧乏 —マス延縄漁のいきさつ

明治四十年代、まだ港のなかった頃の話。

今の霧笛塔から日高造船所にかけては平らな磯になっていた。冬から春にかけて、干潮時には、波が寄せるたびに沢山の小ニシンが打ち上げられ、一面にピチピチはねていた。

そのようなある日、生後まもない塚田正吉をおぶった祖父佐吉が、母ナミとともにその小ニシンを米上げザルですくっていた。これを塩漬にして、シケのときの三平汁の種に、残りはタラ釣りのエサに使うためである。面白いように獲れたもので、四斗樽に何本も貯蔵した。

正吉の生まれた明治四十年の五月、オヒョウ（カレイの一種）の留縄（とめなわ）（海中に数日留めておく延縄《はえなわ》）を揚げに行こうとしたところ、磯のすぐ向こうで、一貫目（四キロ）以上もあるトキサケが、波間でポンポンはねて朝日にあたってキラリキラリと光っている。これを見て、佐吉はふと思いついて、貯蔵した塩ニシンを餌にして曳釣りをしてみたところ、あとからあとから面白いように釣れる。

これが発端となって、マス釣漁が始まった。マス釣りとはいっても実体はトキサケで、当時サケ漁は定置網（道庁認可）以外に認められていなかった。このため一悶着あったが、ときの水産組合組合長小林寿作が「これはマス釣りの糸に勝手にトキがかかったのであって、トキを獲るためではない。そもそもトキはサケではない」として、マス釣りを許可。これが大当たり。その後浦河中の漁師がこぞって延縄を始めた。

塚田正吉の記憶によれば、一番獲れた日には、今の南防波堤の霧笛塔の所から三協冷蔵庫の所まで、柁取（約四〇〇キロ入）のトキがすきなく並んだというから、これを信ずれば一〇〇トン、二〇〇トンという量である。

これが五月末から七月十五日の春漁の切り上げまで続いた。もちろん日によって漁獲の多少はあったものの、からまった延縄を解きほぐし、魚をはずすのに家族はテンテコマイ。米をとぐヒマもない。この頃、三丁目か五丁目かに市川という大福屋があって、その老夫婦が毎日大福を売りに来る。超多忙の浜の人たちはこれを買っては腹の足しにして仕事を続けた。おかげで大福屋は家を建てるだけ儲けたという。

一方で平林、池田、小西などといった仲買人は、これを買って各地へ送ったものの、定置網の魚に較べれば魚が弱く、こちらは大損をした。またこの豊漁を聞きこんで、函館や室蘭からやくざ者が大拳浦河に乗り込んできて、漁師相手に賭場を開帳。漁師たちは水揚げのほとんどを巻きあげられた。

佐吉もこのうちの一人で、これまでの水揚げで残っていた借金二百数十円を返済し、なおかつ三百円ほどの手持ちがあった。これを全部巻きあげられてしまった。“なに又漁に出ればいいさ”とウソぶいていたものの、口惜しくてしょうがない。そこで返したばかりの金をふたたび借りに行った。

「浜ではみんな漁があってずいぶん儲けたって聞いたけど、そうでもなかったのかい……」

「いやちょっと事情があって……」

と、しどろもどろ。それでも六十円を借りた。これを元手に、自分で賭場を開帳しようと考えたのである。狙いは的中。自分では賭けないでテラ銭かせぎに徹し、どうやら百数十円を取り戻したという。

この歴史に残るような大豊漁のおかげで、四十一年の大火（「アサの見た浦河大火」の項参照）の復興も早く、ムシロ玄関の小漁師の家も、おおかたはこのときの建て直して、戸の入った家に住むようになったのだという。

[文責 高田]

【話者】

塚田 正吉 浦河町大通二丁目 明治四十年生まれ

【参考】

浦河寿会拾周年記念誌 昭和五十五年 老人クラブ浦河寿会